STEPHEN KING

Hearts in Atlantis

スティーヴン・キング

白石 朗 訳

下

アトランティスのこころ

STEPHEN KING

Hearts in Atlantis

下

スティーヴン・キング

白石朗 訳

アトランティスのこころ

Translated by Rou Shiraishi Shinchosha

HEARTS IN ATLANTIS
by Stephen King
Copyright © 1999 by Stephen King
Japanese translation rights arranged with Ralph M. Vicinanza, Ltd.
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

アトランティスのこころ（下）

スティーヴン・キング
白石 朗（しらいし ろう） 訳

発　行　2002年4月25日

発行者　佐藤隆信
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　162-8711
住所　東京都新宿区矢来町71
電話　編集部03-3266-5411
読者係03-3266-5111

印刷所　株式会社光邦
製本所　株式会社大進堂

© Rou Shiraishi 2002, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN4-10-501908-2　C0097
価格はカバーに表示してあります。

アトランティスのこころ　目次

一九六〇年　黄色いコートの下衆男たち　上巻　9
一九六六年　アトランティスのハーツ　下巻　5
一九八三年　盲のウィリー　下巻　181
一九九九年　なぜぼくらはヴェトナムにいるのか　下巻　233
一九九九年　天国のような夜が降ってくる　下巻　287
作者覚え書　下巻　307
訳者あとがき　下巻　308
作品リスト　下巻　312

装幀　新潮社装幀室

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

アトランティスのこころ　下

HEARTS IN ATLANTIS

1966

一九六六年　アトランティスのハーツ

いやはや、ひたすら笑いつづけないではいられなかった。

Man, we just couldn't stop laughing.

1

一九六六年にわたしがメイン州立大学にやってきたとき、兄から譲りうけた古いステーションワゴンには、ちぎれて色褪せてはいたが、文字ははっきり読みとれるバリー・ゴールドウォーター支持のステッカーが貼ってあった（《Au H_2O-4-USA》。Auは金の元素記号だから、〝金水（ゴールドウォーター）を合衆国大統領に〟という意味になる）。一九七〇年に大学を去ったときには、車はなかった。代わりにわたしが手に入れていたのは、口ひげと肩まで伸びた髪の毛、そして《**リチャード・ニクソンは戦犯だ**》と書かれたステッカーが貼ってあるバックパック。着ていたデニムジャケットの襟のボタンには、《**おれは幸運な息子なんかじゃない**》とあった。いつの世の若者にとっても大学時代はつねに変化の時期、幼年期におけるさいごの大変革の時期だとは思うが、一九六〇年代後期に大学のキャンパスにたどりついた学生たちが直面したような大規模な変革は、おそらく空前絶後といってもいいだろう。

いまとなれば、わたしと同年代の者が当時を話題にすることもほとんどなくなった。いや、当時のことを覚えていないからではない。あのころわたしたちがつかっていた言語が、いまではうしなわれた言語になってしまったからだ。六〇年代について語ろうとすると――それどころか当時のことを考えようとするだけでも――わたしは恐怖と歓喜というふたつの感情で押しつぶされそうになる。瞼（まぶた）に浮かぶのは、ベルボトムのジーンズとアースシューズ。鼻がとらえるのは、マリファナとパチョリの香り、お香やペパーミントの香り。耳によみがえってくるのは、アトランティス大陸のことを甘ったるく馬鹿げた歌詞で歌うドノヴァン・リーチの歌声だ――いまもなお、寝つけぬまま過ごす真夜中ともなれば、この歌詞が深遠な意味をもっているようにも思えてくる。こうして年をとればとるほど、あの歌の愚かしさを見のがすことも、その甘さにすがりついていることも困難になってきた。ともすれば忘れそうになるが、当時のわたしたちは、いまよりもちっぽけだった。ちっぽけだったからこそ、マッシュルームの下で輝かしい色あいを帯びた暮らしを送ることもできた。いつかマッシュルームが大きく育って木になると信じ、すべてを覆いつくす天蓋（てんがい）の空から自分たちを守ってくれる大きな傘になると信じて。こんな言葉がなんの意味もなさないことくらい、わたしも承知している。しかし、これがわたしにできる精いっぱいだ――〝アトランティス万歳〟をとなえることが。

2

最終学年をおえたときには、わたしはキャンパス外にある〈LSDエーカーズ〉内の、スティルウォーター川ぞいに建っていた、いまにも崩れそうなキャビンに住んでいたが、一九六六年のメイン州立大学入学当座は、チェンバレン・ホール（男子）、フランクリン（女子）と三棟あった寄宿舎のひとつだった。これ以外にホリオーク・コモンズという名前がついた食堂の建物が、三つの寄宿舎から若干離れた場所にあった。といっても、それほど離れていたわけではなく、せいぜい二百メートルというところだったが、寒風吹きすさぶ氷点下の冬の夜ともなれば、はるか彼方にあるように思えたものだ。こんなふうに遠くにあったせいで、ホリオーク・コモンズは、〈大草原の宮殿〉なる通称で知られていた。

大学ではたくさんのことを学んだが、教室で学んだことはほとんどなかった。わたしは、女の子にキスをしながら同時にコンドームを装着する方法を学び（習得必須であるにもかかわらず、軽視されがちなテクニックだ）、途中で吹きださずにビールのロング缶をひと息で飲み干す方法を学び、手すきの時間を利用して小づかい稼ぎをする方法を学び（わたしよりも金をもっている学生――ということは大多数の学生――の学期末レポートの代筆）、一貫して共和党を支持してきた家系の出であるにもかかわらず共和党員にならないすべを学び、プラカードを頭上高くかかげ、《ワン・ツー・スリー・フォー、おまえらのクソったれな戦争に手を貸すものか！》とか《ヘイ・ヘイ、LBJ、きょうは何人の若者を殺したんだい？》などと叫びながら街頭に繰りだす方法を学んだ。催涙ガスの風上に身をおくよう心がけることを学び、それがかなわない場合には、ハンカチかバンダナを顔にあててゆっくりと呼吸することも学んだ。また警棒が繰りだされてきた場合には、地面に倒れて体を横向きにし、膝を思いきり胸に引きよせ、さらに両手で後頭部をかばうことも学んだ。一九六八年のシカゴでは、こちらがいくら防御体勢で身を守ろうとしても、警官たちにはこてんぱんに叩きのめされることを身をもって学んだ。

しかし、こうしたことを学ぶ前にまずまっさきに学んだのは、ハーツの楽しさと危険性だった。一九六六年秋には、チェンバレン・ホールの三階にならぶ十六の部屋に、総勢で三十二人の男子学生が暮らしていた。それが一九六七年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の一月には、そのうち十九人までがハーツの犠牲となって寄宿舎を出るか、落第するかしていた。ハーツは、きわめて伝染力の強いインフルエンザのごとく猛威をふるった。完全な免疫をそなえていた学生は、三階にはわずか三人しかいなかったと思う。ひとりは、わがルームメイトのネイサン・ホッペンスタンド。もうひとりはフロア監督をつとめていたデイヴィッド・ディアボーン、愛称ディーリー。三人めはストークリー・ジョーンズ三世で、この学生はまもなくチェンバレン・ホール住人たちのあいだでリップ・リップという愛称で知られるようになった。ときにわたしは、このリップ・リップのことをこそ語りたいと思うことがある。またときには、当時いちばんの親友だったスキップ・カーク（もちろん、のちには《スター・トレック》にちなんでキャプテン・カークと呼ばれるようになる）のことをこそ語りたいと思う。またときには、キャロルのことをこそ語りたいとも。いちばんひんぱんに思うのは、いくら不可能なことに思えようとも、やはり六〇年代のことを語っておきたいという気持ちだ。しかし、そうした話の前に、まずハーツのことを話しておくのが筋だろう。

あるときスキップはこんなことをいった。ホイストは愚か者のためのブリッジであり、ハーツは真の愚か者のためのブリッジだ、と。この意見はどこか的をはずれてはいるが、ここでは反論はさし控えよう。肝心な点を述べておくなら、ハーツはまず楽しいゲームであり、これに金を賭けるとなると――ちなみにチェンバレン・ホールでのレートは一点あたり五セントだった――たちまちこのゲームに囚われてしまう、ということだ。理想的なプレーヤーの数は四人。トランプのカードがすべてくばられてから、駆引きのゲームがはじまる。一回のゲームでやりとりされる点は合計で二十六点――十三枚のハートの札それぞれが一点で、スペードのクイーン（わたしたちのあいだでの通り名は〈性悪女〉）は一枚で十三点になる。四人のプレーヤーのうち、だれかの罰点数が百点を越えればゲームは終了。もっとも罰点数のすくなかった者が勝者になる。

わたしたちのマラソンのように長時間におよぶゲームでは、勝者以外の三人のプレーヤーが自分と勝者の点数差に応じて、しぶしぶ金を吐きだす決まりになっていた。たとえば、ゲーム終了の時点でわたしとスキップの点数差が二十点だったとすれば、わたしは一点五セントのレートにしたがって一ドル支払うことになる。端金じゃないか――いまの人はそういうだろう。しかしこれは一九六六年のことであり、チェンバレンの三階に住む労働学習課程の学生にとって、一ドルは断じて端金ではなかった。

3

ハーツ疫病がはじまったのがいつかという点については、明確な記憶がある――十月最初の週末だ。これを覚えているのは、ちょうど一学期最初の予備試験が一段落し、わたしの首がつながったからだ。チェンバレン三階の男子学生の大多数にとっては、〝首がつながる〟ことが大問題だった。というのも、わたしたちが大学にいられるのは各種の奨学金や学生ローン（わたしの場合もふくめ、その大半は連邦教育防衛法のおかげによるものだった）、それに労働学習課程があってのことだった。たとえていうなら、釘ではなく糊をつかって組み立てた車でソープボックス・ダービーに出場するようなものだったし、各人で事情や立場は異なっていたとはいえ――このあたりは、もっぱら提出書類の記入術にどの程度長けているか、ハイスクールの進路指導カウンセラーたちがどこまで親身に努力してくれたかに左右される――全員に共通する冷厳な人生の事実があった。そして、その事実を要約した刺繍飾りが、わたしたちが長時間マラソンのようなハーツのトーナメント・ゲームをおこなっていた三階のラウンジの壁にかかっていた。この刺繍をつくったのは、トニー・デルッカの母親だった。母親はこの刺繍をトニーにわたし、毎日目につくところに飾りなさいという指示とともにトニーを大学に送りだした。一九六六年の秋が深まり、代わって冬がおとずれ、ハーツのゲームが一回おわるたびに、〈性悪女〉が手に落ちてくるたびに、教科書をひらくこともノートで勉強することもレポートを書くこともしないままベッドに転がりこんで眠る日を重ねるたびに、この刺繍はますます大きくなって、輝きを増してくるかに思われた。そればかりか、一、二度はこの刺繍を夢に見さえした。

2.5.

刺繍飾りには、この数字が赤い糸をつかって大きく縫いこまれていた。ミセス・デルッカはこの数字の意味を理解していたし、わたしたちも理解していた。通常の寄宿舎――ジャクリンでもダンでもいい、ピースでもチャドボーンでもいい――に暮らしている学生なら、たとえ成績の平均が一・六でも、一九七〇年度卒業生としての地位は確保できる……もちろん、父さんと母さんが請求書どおりに学

費を払いつづけるかぎり。お忘れなきよう。わたしたちの大学は、州政府の援助を得て運営される大学であって、ハーヴァードやウェルズリーといった大学とは話がちがう。しかし、奨学金とローンのお荷物を背負ってよろめきながら完走をめざす学生にとっては、平均成績二・五が地面に引かれた境界線だった。二・五以下の成績になること――いいかえれば平均Cから平均Cマイナスに落ちること――は、ソープボックス・ダービーで乗っているちっぽけな車が分解寸前になることを意味する。スキップ・カークの当時の口ぐせを借りるなら、「じゃあな、あばよ、またな」ということだ。

最初の予備試験でのわたしの成績はまずまずだった――ホームシックのあまり体調を崩しかけた若者としては上々といっても過言ではない（それ以前に家から離れたのは、バスケットボールで出かけた一週間のキャンプのときだけだったし、キャンプをおえて帰宅するときには手首を捻挫し、足の指のあいだと陰嚢の裏側に奇妙な疥癬ができていた）。試験をうけた全五科目では、新入生英語以外はすべてBの成績。英語ではAをとった。担当教官――のちに離婚し、バークリー・キャンパスのスプローラル広場で大道芸を披露するようになった男――はわたしの答案用紙の余白に、《例としてあげられた擬音語がすばらしい》というコメントを書いてよこした。わたしは答案用紙を実家の両親に送った。母はたったひとこと、燃えるような勢いのある字で《ブラヴォー！》とだけ書いた葉書の返事をくれた。このことを思い出すと、わたしの胸は予期せぬ痛みに襲われる。それも現実の肉体の痛みに近いほどの痛みを。このときをさいごに、片隅に金星が書きこまれた答案用紙を家にもって帰ったことは二度となかったと思う。

最初の予備試験をおえたのち、わたしはかなり虫のいい計算で、この先の学業平均値を三・三と予測した。ところがこの数字に近づくことはなかった。そればかりか、十二月の下旬には自分の選択肢がはっきりかぎられていることを悟るようになっていた――カード遊びをやめ、ささやかな学費援助を無傷のままたもって、次の学期まで首をつなげるか、ミセス・デルッカの刺繍がかかった三階ラウンジで〈性悪女〉狩りをつづけ、クリスマスになったらゲイツフォールズに帰って、それっきり大学にはもどらない、という二者択一だった。

そうなっても、ゲイツフォールズ縫製工場に職を得ることができるはずだ。父は事故で視力をうしなうその日まで、二十年にわたってこの工場で働いていた。父の口ききがあれば就職できるだろう。母は不満を感じるはずだが、なに、工場で働くことが希望だとわたしがいえば、邪魔だてはしないはずだ。なんのかんのいっても、母はいつも一家の現実主義者だった。希望と失望とに正気を半分なくすような状態にあっても、母は現実主義者だった。しばらくのあいだ、母はわたしが大学に挫折したことで悲しみに打ちひし

がれるだろうし、しばらくはわたしも罪悪感に責め苛まれるはずだが、いずれはどちらも乗り越えたはずだ。それになにより、わたしは作家志望であって、英語教師になるのは願い下げだったし、小説を書くのに大学教育を必要とするのは虚栄心が先に立った作家だけだという意見をもってもいた。

とはいえ、やはり落第したくない気持ちはあった。一人前の大人としての人生の門出には、落第がふさわしくないように思えた。なにより挫折のにおいがしたし、作家たる者は人民とともにおのれの仕事を果たすべし、などとホイットマン流の考えを思いめぐらしたところで、その考えそのものが挫折を正当化する屁理屈のにおいをはなっていた。それでもなお、三階ラウンジはわたしを呼んでいた――カードの鳴る音、ゲームが右まわりか左まわりかをたずねるだれかの声、だれが〈灌腸〉をもっているかと質問するべつの学生の声（ハーツはまずクラブの二を場に出すことからはじまるが、このカードを三階の中毒患者たちは〈灌腸〉と呼んでいた）。さらに、ロニー・マレンファント――ジュニア・ハイスクールのいじめっ子どもをかわして以来、わたしがはじめて出会った、生まれながらにして骨の髄まで下衆根性が滲みついた筋金いりのケツ穴男――がつぎからつぎにスペードのカードを出していきながら、かん高く上っ調子な声で、「〈性悪女〉狩りの時間だぞ！　みんなで〈カント〉を追っかけようぜ！」と叫んでいる夢も見た。思うに、わたしたち人間はほとんどつねに、自分の最善の利益のありかを見さだめてはいるが、いくら見さだめていても、肌で感じることのほうが比較にならないほど大きな意味をもつ場合もあろう。悲しいかな、これは事実だ。

4

わたしのルームメイトはハーツで遊ばなかった。わたしのルームメイトは、宣戦布告なくはじまったヴェトナムでの戦争をいっさい認めていなかった。わたしのルームメイトは、郷里に住むガールフレンド、ウィズダム・コンソリデイテッド・ハイスクールの最上級生のガールフレンドに毎日手紙を書いていた。このルームメイト、ネイト・ホッペンスタンドのとなりに水のはいったコップをおけば、コップの水のほうがまだしも活動的に見えただろう。

ネイトとわたしの部屋は三〇二号室、階段のすぐとなりにあり、廊下をはさんで向かい側はフロア監督の部屋（おぞましきディーリーのねぐらだ）、カードテーブルやスタ

ンド式灰皿があり、〈大草原の宮殿〉がよく見えるラウンジからは、廊下を突きあたりまで進んだ場所にあった。大学の寄宿舎管理局についてはだれもが不気味な臆測をめぐらしていたが、わたしとネイトが同室にさせられたというこの事実は――余人はいざ知らず、このわたしには――そうした臆測の正しさを証明しているかに思えた。六六年四月（この時点での心配ごとといえば、高校卒業を記念するダンスパーティーのあと、どこでアンマリー・スーシーと食事をしようかといったものだった）に寄宿舎管理局あてに提出した調査票で、わたしは自分が（A）喫煙者であり、（B）共和党を支持し、（C）フォーク・ギタリスト志望者で、（D）夜型人間だと書いた。それなのに、いかなる叡知の配慮かは千古の謎だが、寄宿舎管理局はわたしをよりにもよってネイト――非喫煙者で歯科医志望者、アルストゥック郡民主党支部の党員を家族にもつ学生（ちなみにリンドン・ジョンソンが民主党員であるという事実も、南ヴェトナムの地をアメリカ軍兵士が走りまわっていることについてのネイトの意見をやわらげさせはしなかった）――と同室にしたのである。わたしは自分のベッドの上に、ハンフリー・ボガートのポスターを貼った。ネイトがベッドの上に貼ったのは、愛犬とガールフレンドの写真だった。ガールフレンドはウィズダム・ハイスクールのバトンガールのユニフォームを着た血色のわるい娘で、棍棒をもつような手つきでバトンを握っていた。名前はシンディ。犬の名前はリンティ。犬も娘も、まったく区別のつかない堂々たる笑顔を見せていた。腹立たしいほど超現実的な光景だった。

ネイトの欠点の最たるものは――スキップとわたしが見た範囲では――ネイトがシンディとリンティの写真の下、RCA製のしゃれたスウィングライン型レコードプレーヤーの上に几帳面にもABC順にならべているレコードのコレクションだった。コレクションにはミッチ・ミラー合唱団のレコードが三枚（《ミッチと歌おう》《続・ミッチと歌おう》《ミッチ&ザ・ギャングが歌うジョン・ヘンリー作品とアメリカ愛唱歌傑作選》）、《トリニ・ロペスの世界へようこそ!》、ディーン・マーティンのアルバムが一枚（《ディノ・スウィングス・ヴェガス!》）、ジェリー&ザ・ペイスメーカーズのアルバムが一枚、それにデイヴ・クラーク・ファイヴのファーストアルバム――おそらく、ロック史上最低のやかましいばかりの駄作――をはじめ、この手のレコードがどっさりあった。とてもすべては思い出せないが、それはそれでいいことなのだろう。

「ネイト、よしてくれ」ある晩、スキップがそういった。「頼む、もう勘弁してくれ」

これはハーツ熱が猛威をふるいはじめる直前、それもほんの数日前のことだった。

「勘弁してくれ……って、なんのことだ?」机にむかってなにやらしていたネイトは、顔をあげもせずにたずねた。

この男は起きている時間のすべてを、机にむかっているか教室にいるかして過ごしているように思えた。ときおり、ネイトが鼻をほじっては、とりだした鼻くそを（徹底したつぶさな観察ののちに）机の中央にある抽斗の裏側にこっそりとなすりつけている現場を目にすることもあった。これがネイトの唯一の悪趣味だった……いや、これは音楽における恐るべき悪趣味を度外視すればの話。

スキップは、ネイトのレコード・コレクションを検分していた。この男はだれの部屋をたずねても、恬として恥じるところのいっさいないまま、その部屋のあるじのレコード・コレクションを調べる癖があった。いまスキップは、一枚のレコードをかかげていた。スキップの顔には、不吉なレントゲン写真を……それも、大きな（十中八九は悪性の）腫瘍が写っているレントゲン写真を手にした医者の表情が浮かんでいた。スキップは、デクスター・ハイスクールの校名がはいったジャケットとハイスクールの野球帽という姿で、ネイトとわたしのベッドのあいだに立っていた。大学時代からいままでをふりかえっても、キャプテンことスキップほど〝アメリカン・パイ・ハンサム〟を地で行く美形の男と会った記憶はほとんどない。スキップ本人は自分がハンサムであることに無頓着に見えたが、そんなはずはない。その事実にまったく気がついていなかったとしたら、あれほどひんぱんにセックスの機会に恵まれたはずはなかったからだ。たしかに、ほとんどだれにでもセックスの機会がめぐってくる時代だったが、当時の基準に照らしてもスキップは忙しかった。しかしそのどれひとつとして、一九六六年の秋にはまだはじまっていなかった。なぜなら一九六六年の秋には、スキップの心は――わたしの心とおなじように――ハーツに捧げられていたからである。

「なあ、きみ、こいつはまずいぞ」スキップはからかいの調子をたたえた穏やかな声でいった。「こんなことをいうのは心苦しいが、こいつはほんとにヤバいぜ」

わたしは自分の机の前にすわり、ポールモールを吸いながら、寄宿舎食堂の食券をさがしていた。この忌まいましい代物を、わたしはしじゅうなくしてばかりいた。

「なにがヤバいって？　なんできみは、ぼくのレコードを調べたりしているんだ？」ネイトの前には、植物学の教科書がページをひらいておかれていた。いまネイトは、方眼紙に植物の葉を描いているところだった。大学の新入生のしるしである青いビーニー帽は、頭のうしろのほうに押しあげられていた。わたしの記憶が確かなら、ネイト・ホッペンスタンドはこの馬鹿げた青い雑巾を、メイン州立大学の哀れなフットボール・チームがようやくタッチダウンを決めたその日まで――ちなみにこれは、感謝祭の一週間ほど前だった――律義にかぶりつづけていた唯一の学生だったはずだ。

スキップはなおも手にしたレコードに目をむけていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com